

斐太北小 ESDだより

Education for Sustainable Development(持続可能な社会の創り手を育む教育)

過去から学び、未来へつなぐ

～150年の歩みをたどる4年生の学び～

今年、創立150周年を迎えた斐太北小学校。4年生は、学校のこれまでの歩みを調べ、年表にまとめる学習を進めています。

子どもたちは、150年の歴史と自分たちの生活をつなげるために、おじいちゃんやおばあちゃん、お父さんやお母さん、兄や姉にインタビューをして、昔の学校の様子を聞き取っています。

お互いに聞いてきた情報を交換し合いながら、

「へえ、こんなことがあったんだ。」

「昔は、夏休みにいつもプールに来られたんだね。」

いいなあ。」

「今の1年生教室のそばに、パソコンルームがあったんだって。」

など、びっくりしたり、不思議がったりしていました。

—— そんな話を聞くたびに、子どもたちは、学校が長い年月の中で地域の人々に支えられてきたことを実感しています。

そして今、「未来の斐太北小学校をどうしていきたいか」というテーマにも発展しています。22日(水)の昼の放送で、全校児童に、家族からのインタビューを年表に書き加えてほしいこと、未来の斐太北小学校についての夢や願いを書いてほしいことを伝えていました。

「地域の人とずっと交流できる学校にしたい」「エレベーターがあるといい。いろんな人が学校に来られる。」

—— 子どもたちは、自分たちなりに未来の学校像を考え始めています。

この活動は、過去を知り、今を見つめ、未来を創る学びです。自分たちの学校の歴史や、地域とともに歩んできた150年の意味を考えることは、ESD(持続可能な開発のための教育)の大切な実践です。斐太北小学校がこれからも地域とともに歩み続けることを願って、4年生の学びはさらに広がっていきます。

今週末の記念式典と講演会の休憩時間に、来賓や斐太北小にゆかりのある方々にも、**これからの150年へ思いを巡らせ♡型カード**を書いてもらう予定です。保護者、地域の皆様もぜひ、未来の斐太北小学校について夢や願いを書いてみませんか？ お気軽にご来校ください。



30年前につき山ができた。

一、二年の時は、かんやをきゅう食ひ食べていた。

プールがなくて、川であそんでいた。

ひだきたっちラジオ 10月7日(火)～25日(土)まで



－150年の歴史を、今につなぐお昼のひととき

創立150周年を迎える今年、10月7日(火)からお昼の放送で始まったのが、校長による「ひだきたっちラジオ」です。毎日5分ほど、斐太北小の歴史や地域で学校を支えてきた人々の努力、昔と今のつながりについて語っています。

そもそも、ラジオを聴かない子どもたちが多いので…何が始まったんだと驚いた反応が多かったです。最初は静かに耳を傾けていた子どもたちも、回を重ねるうちに「今日はどんなお話かな?」「いつから動物を学校で飼うようになったんだろう?」「校長室前の小屋はいつつくられたの?誰が使っていたの?」と質問の答えを考えたり、自分のハガキが読まれて喜んだり、楽しみに待つようになりました。BGMは、毎回5、6年生が記念式典で合唱する「小さな勇気」という曲です。

放送の感想や学校についての質問をハガキに書いて届けてくれる“リスナー”も増え、子どもたちの中に、学校の歩みを自分ごととして感じ取る姿が生まれています。

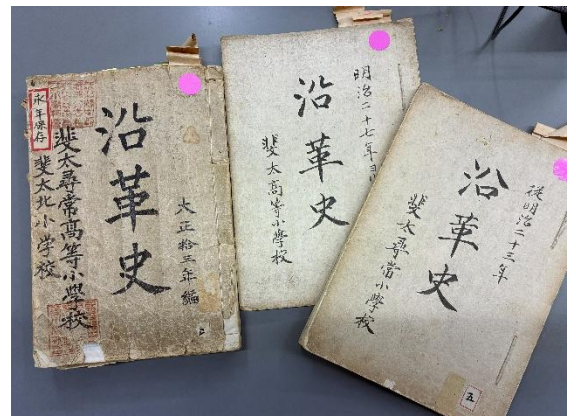
ハガキを書く様子→



「校長室の前の小屋は、昔ヤギを2頭お世話して、赤ちゃんを産むまで育ててみたいと思った1年生が頼んで作ってもらったんだって。でも、まさか…2匹ともお母さんヤギだったんだって。子ブタもこの小屋で育てていたことがあったそうですよ。」

「150年間で一番子どもの人数が多かったのは昭和18年。男子236名。女子212名。合計448人。太平洋戦争のころだったんだね。」

「校歌は1956年(昭和31年)、69年前から歌い継がれているんだね。作詞の小山直嗣(なおつぐ)さんは、戦後、新潟の民話や伝説を歩いて集めていった人。失われゆくものを一つ一つ集めた人なんだね。作曲の小山郁之進(いくのしん)さんは、兄弟?親子…でもなかったそうです。新潟大学の音楽の先生をしていたそうです。閉校した矢代小学校や斐太南小学校の校歌も、この二人で作ったんだって。」



金庫に永年保存されている沿革誌をひも解いて調べた子どもからの質問もありました。

この放送は、歴史を学ぶ活動であると同時に、人と人との思いをつなぐ時間でもあります。校長の語りを通して、子どもたちは「今の自分たちの学びや生活も、先人たちの努力の上にある」という気付きを得ています。150年の歴史が、放送を通して教室に、心に、そして未来へとつながっていく——「ひだきたっちラジオ」は、過去・現在・未来を結ぶ斐太北小の『声のかけ橋』になるといいなあの思いから続けてきました。心で聴く150年の物語になればと。